

京都大学人文科学研究所の立木です。松林先生のお話がとてもおもしろく、しかも中身のあるお話だったのにたいし、私のほうは雑誌の性質もあり、内容をまとまった観点からご紹介することができませんので、残念ながら形式的な事柄にかかわるお話で終始してしまうと思いますが、どうかご容赦下さい。

人文科学研究所には三種類の紀要があります。まず、日本語で書かれる『人文學報』。それから、日本語と中国語——しかも日本語の場合には旧字体で書かれます——『東方學報』があります。これはいわゆる「東方学」の雑誌で、中国だけでなく、チベットや西アジアの研究、あるいは雲崗石窟の調査のようなオリエントの考古学研究の担い手たちが投稿します。そして三つ目、欧文誌『ZINBUN』があります（いつかこのZをJに改めたいと思っていますが、いまのところこういう表記が伝統になってしまっています）。いま「欧文誌」といいましたが、ヨーロッパ語だったらいずれの言語でもよいというわけにはさすがにいかず、事実上、その時々研究所のスタッフがどの言語に対応できるかにかかってきます。いまは英語、フランス語、ドイツ語——そしてロシア語を話す人がいるので、ロシア語も可能といえば可能なのですが——、基本的には英、仏、独に限定して投稿を募集しています。欧文誌という名目ではありますが、実際にはもっぱらこの三言語の範囲でしか受けつけられないのが現状です。

さて、以上三つの雑誌のうち、私が編集にかかわっているのは『ZINBUN』だけですので、本日はこの『ZINBUN』を中心に、ただし『人文學報』と共通する点も含めて、お話ししたいと思います。

みなさん「人文研」のことをどれくらいご存知でしょうか。「人文研」といえば、かつてはたいへん華やかで、桑原武夫先生、貝塚茂樹先生、今西錦司先生、梅原猛先生、それから、先ほど松林先生からお名前の挙げた梅棹忠夫先生、もう少し近いところでいうと、1980年代には浅田彰先生もおられたように、まばゆいばかりの人材が集まっていたことで知られています。やはり松林先生から、横山俊夫先生のお名前も挙がりましたね。現在の人文研がかつての人文研に匹敵する輝きを放っているかどうかは、みなさんのご判断にお任せするとして、ここでは「人文研」という組織のルーツを、手短かにですが、お話することからはじめなくてはなりません。というのも、人文研に三つの雑誌が存在することは、人文研が成立した歴史と切り離せないからです。

京都大学人文科学研究所は、1949年に三つの機関が統合されて生まれました。その三つというのは、まず、1929年に設立された東方文化研究所。これはもともと外務省が管轄していた組織で、その名のとおり中国学やオリエント文化研究を行う研究センターでした。もしかすると、みなさんのなかには、人文研というと北白川の洋館を思い浮かべられる方も多いのではないかと思います。あそこは、もともとはこの東方文化研究所の持ち物でしたが、その後、同研究所が人文研に組み入れられてから、人文研の「東方部」、すなわち中国学・オリエント学の人たちが研究室を置く場所になりました。現在は、人文研「東アジア人文情報学研究センター」が設置されています。

人文研のルーツの二つめは、西洋文化研究所です。もともとは1934年に設立された「ドイツ文化研究所」という民間団体で、吉田牛ノ宮町にあり、ドイツのことはもちろん、英国・米国の文化なども研究していました。いまでいえば、ゲーテ・インスティトゥートに当たるかと思うのですが、もちろん戦後のドイツからナチス時代の遺物は一掃されますので、現在のゲーテは、このドイツ文化研究所とは全く別の組織です。ドイツ文化研究所は、戦後、完全に解体され、建物や資料のいっさいが占領軍に接収されてしまいます。しかし、そのあと社屋と施設は返還され、1946年に西洋文化研究所として再スタートしました。じつは、ドイツ文化研究所の資料のごく一部は、どうやら社屋とともに返ってきたようで、それらはいま人文研の倉庫に眠っていますが、まだ説明が進んでいません。ちなみに、社屋の設計は村野藤吾で、当時のモダニズム建築を代表するような建物でした。しかし、1949年に西洋文化研究所が京都大学人文科学研究所に統合されたのち、1975年にこの建物は壊され、建築的には味気ない別の建物に取って代わられました。人文研は2008年度にその建物から現在の今出川通り沿いの建物に引っ越しますが、そのあとそこに入居したのが、ご存知のように山中先生のiPS細胞研究所です。

三つ目のルーツはいわゆる「旧人文科学研究所」、すなわち、1939年に京都大学の附属研究所として発足した「人文科学研究所」です。産業経済や社会史、教育史、文化交渉史の研究を主な柱に、京都大学の文・法・経済・農の各学部の支援を受けて活動していました。この発足当時のディシプリンでいうと、教育史だけは現在の人文研にはありません。

さて、以上の三つの機関が統合されて、1949年、京都大学人文科学研究所は新たなスタートを切りました。現在の人文研の組織は、2000年に改組されて以来のもので、このときに小部門制から大部門制への移行が行われ、それまで16部門ほどの小部門だったのが、5部門プラス1附属センターという体制に生まれ変わりました。そのうち3部門、「文化研究創成」「文化生成」および「文化連関」と名づけられた部門を「人文学研究部」（通常「人文部」と略されます）、残りの2部門、すなわち「文化表象」「文化構成」の2部門と、さらに附属センター——2000年の改組当時はひとつだけですが、現在では「東アジア人文情報学研究センター」と「現代中国研究センター」の二つがあります——を「東方学研究部」（あるいは略して「東方部」という二つの「研究部」に整理しました。現在、助教も含めると、人文部27名、東方部26名という構成になっています。今年3名の退職がありますので、一時的に減りますが、両部合わせると大体50名を越える人数です。

少し話が行き過ぎましたが、重要なのは次の点です。先ほどお話ししたように、現在の人文研には三つのルーツがありますが、それはようするに、東方学と西洋学を旧人文科学研究所の器のなかで融合させたということです。そこから、「人文学」全般にかかわる日本語の雑誌『人文學報』のほかに、東方学に特化した『東方學報』、西洋学に特化した『ZINBUN』が存在するのは、こういってよければ自然な流れといえると思います。そして慣例上、『東方學報』の編集は東方部、他の二誌の編集は人文部が担当しています。

それでは、具体的な編集の体制を見て参りましょう。これら三誌は、現在いずれも査読制を採っています。といっても、最初から査読制だったわけではなく、三誌すべてが査読制に移行し

たのはわりと最近のこと、この10年くらいのことです。また、査読制といっても、完全なオープンではなく、投稿資格に「人文研に制度的にかかわっている、あるいはかかわったことがある人」という制限を設けています。さらに、投稿論文を掲載するほかにも、人文研で開かれたシンポジウムやセミナーの記録を、ひとつの号に小特集として組み込んだり、あるいは、人文研の「本務」である共同研究の——3年から5年に及ぶ活動の——成果の報告書として1巻を（ただしその場合は臨時号として）まるまる編んだりすることもあります。つまり、すべての巻が完全に投稿論文だけから成るわけではなく、ひとつの巻のなかに査読論文と並んで特集論文が組み入れられる場合や、巻全体が何らかの共同研究の報告書になる場合もある、ということです。

なお、投稿資格について言葉を足しておく、「人文研に制度的にかかわっている、あるいはかかわったことがある人」のうちには、共同研究の班員や、国内外から受け入れている研究者、たとえば招聘外国人学者の方たち、そしてもちろん学術振興会特別研究員や、それ以外の研究員・研究生などを広く含みます。とりわけ、人文研の共同研究班には、博士課程以上の研究者なら、原則としてどなたでも参加できますので、そうした共同研究がつねに20班ほど走っていることを考えると、班員だけで相当な数になります。それらの人は誰でも投稿できるのです。加えて、厳密な意味で「人文研に制度的にかかわった」ことがない人でも、編集委員会が適当と判断した場合には投稿を受けつける、という枠も設けてあります。

ところで、これら三つの雑誌は、慣例的に東方形と人文部に分かれて編集を担当すると申しましたが、投稿者も同じようにきっちり住み分けているわけではありません。東方形、すなわち中国学やオリエント学を研究している人が、英文やその他の欧文で発信する場を求めて、『ZINBUN』に投稿してくることもあります。今年度も一件そういう論文がありました。だいたい毎年、そのような論文が『ZINBUN』に掲載されます。

問題は——おそらくここがいちばん面白いというか、みなさんもお関心がおありのところだろうと思いますが——、これらの雑誌はいずれも常任の「編集委員」を置いていない、ということです。編集責任者（『ZINBUN』の場合、「編集委員会事務局」という肩書きを充てています）は、「出版委員」という所内委員が2年交代で務めます。みなさんもそれぞれの部局で、いろいろな委員に就いておられると思いますが、人文研には「出版委員」というのがありまして、他の委員同様、原則として2年で交代します。人文部、東方形に2人ずつ「出版委員」がいますが、人文部のほうはそのうちのひとりが『人文學報』を、もうひとりが欧文『ZINBUN』をそれぞれ担当することになります。私は今年度から『ZINBUN』を担当しています。つまり、今年度と来年度は私が担当します。

具体的な編集体制については、編集作業のフローに沿ってお話ししましょう。投稿がありますと、事務局は、それぞれの投稿論文について、その主題に近い分野を研究する准教授以上の所員1名を「連絡係」に指名します。「連絡係」は、査読をコーディネートし、査読のプロセス一切にいわば責任を負います。そうすると、ある号に10本の論文が投稿されれば、10人の連絡係が指名されるわけですが、その10人の連絡係と出版委員である事務局とが、その号の「編集委員会」を構成することになります。つまり、『ZINBUN』の編集委員会は——この点では『人文學

報』も同じですが——、固定メンバーで何年かにわたって常設されるのではなく、投稿論文のテーマに応じて毎年構成し直されるのです。したがって、編集委員の顔ぶれは、当然のことながら毎年変わってきます。各「連絡係」は、所の内外から査読者2名を選任し、査読を依頼します。査読者への謝金は、いまのところお支払いしていません。これについては所内に異論もあるのですが、いまは謝金ナシでやっています。査読者については、人文研の助教がこれを務めることもあります（うちの助教はみな、なかなか優秀です）。査読期間は一か月程度で、査読結果は「連絡係」が取りまとめ、それを事務局、つまり今年度と来年度なら私に報告して、私から投稿者に通知をする、という仕組みです。

ほんとうなら、それぞれの雑誌にどんな論文が集まっているのか、みなさんにお見せできたらいいのですが、掲載される論文の内容の幅がとにかく広いため、さすがにそれは諦めざるをえません。テーマティックの分類を行って、統計的に整理してみたらどうかとも思ったのですが、そもそもどのような分類項目を設けたらよいのかを考えるだけで挫折してしまいました。実際、『ZINBUN』には、歴史や思想や人類学から、先ほどお話ししたように東方学や、私のように精神分析のことをやっている人、あるいは音楽学や芸術学を研究している人などが投稿してきます。ご興味がおありの方は、どうぞ人文研研究所のホームページから、「研究所の出版物」（左側の一覧）をクリックしていただいて、人文研紀要ワールドをのぞいてみていただければと思います。

最後に、私たちが抱えている課題について思いつくままに挙げてみます。まず、投稿の募集ですが、人文研の本務は先ほども申したように「共同研究」ですので、それぞれの研究会に若手がたくさん来ています。若手というのはつまり、博士課程やPDの人たちです。『ZINBUN』の投稿希望者は、毎年8月末の〆切に先立って、5月末までに予定題目をエントリーしなければなりません。そのため、新年度がはじまるとすぐ、研究会の連絡網（メーリングリスト）を通じて、これらの日程を周知し、投稿を呼びかけています。これはなかなか効果があり、毎年わりあい多くの論文が投稿されます。ただし問題は、所員（常勤の教授や准教授）がほとんど書かないことです。それぞれに著書や、所外の雑誌などからの依頼などを抱え、だいたいいつでも〆切に終わっている状態なので、紀要論文を書く時間がほんとうにない。これはどうしたものかと折に触れて議論してはいるのですが、なかなか難しいです。とはいえ、若手研究者に書ける場所を提供するという意味では、人文研の雑誌はそれなりに貢献していると思います。

所内で議論が続いているといえば、これも繰り返さねえしになりますが、査読者への謝金の問題もあります。いまのところ、そのための予算措置はしていません。長い目で見れば、予算措置をして、幾ばくかの謝金を査読者にお支払いできるに越したことはない、という意見もあり、今年度の『人文學報』・『ZINBUN』合同編集会議でも問題になりましたが、反対に、文系の学会では謝金は支払われないことのほうが一般的なので、特になくてもよい、という意見も出ました。実際、紀要類のための予算がそれほど潤沢ではないことに鑑みても、謝金を支出するだけの余裕は正直なところありません。ということで、議論は先送りになりました。

他方、最近とみに感じることですが、『人文學報』や『ZINBUN』に投稿してくる博士課程の学

生さんや、PDの方たちの日本語や外国語のレベルが著しく低い。これには参ります。こんな状態で投稿されても、内容以前にもうコトバというか書き方のレベルでアウト、というのが多いのです。学部や研究科の先生方がお忙しいのは百も承知ですが、やはりご自分の指導なさっている学生さんが投稿するときには、できれば投稿前に一肌脱いでいただいて、論文の日本語や外国語のレベルをチェックしていただけたら、と思わずにはられません。

そして最後になりますが、雑誌の理想はやはり投稿資格の限定を外せることです。完全にオープンな雑誌にすべきではないかという議論はずっとあります。例えば、日文研の雑誌は完全にオープンです。とりわけ日本研究をしている人にとって、欧文で投稿できる場所はたいへん限られているので、ほんとうなら『ZINBUN』もオープンにできたらいいのですが、いまの体制ではやはり難しいといわざるをえない。投稿数が増えれば、所員の負担がそれにつれて大きくならざるをえない仕組みだからです。

雑駁なお話に終始して恐縮ですが、私からは以上です。